

満ち足りた生涯

ヨブ記 42 章 7-17 節

はじめに

月の第四週に私が説教をさせていただく時には、旧約聖書の「ヨブ記」からお話することになっています。今日で「ヨブ記」も終わりとなります。ヨブは最後どうなるのでしょうか。神様とヨブの関係、そしてヨブと三人の友人たちの関係はどうなるのでしょうか。

「ヨブ記」の全体を振り返りながら、「ヨブ記」が語ろうとしていたメッセージは何かを考えてみたいと思います。

1. ヨブの試練と信仰

ヨブは、誠実な心を持っていて、神様を愛し悪から遠ざかっている人でした。神様は、そんなヨブを祝福して、多くの財産と多くの子どもを与えられました。

しかしそんなヨブに、サタンが目留めて、神様にこう言うのです。「ヨブは、あなたに祝福されて、多くの財産と多くの子どもに恵まれているから、あなたを愛しているに過ぎません。もし財産と子どもを失えば、きっとあなたへの信仰を捨てるに違いありません」。

そこで神様はサタンに、ヨブの財産と子どもを奪うことを許可しました。するとヨブは、一日の内に犯罪や自然災害に巻き込まれて、すべての財産と子どもを失ってしまうのです。

しかしヨブは、そのような試練の中でも、決して神様への信仰を捨てませんでした。彼は、神様を礼拝してこう言うのです。「**私は裸で母の胎から出て来た。また裸でかしろに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな**」(ヨブ記 1:21)。

するとサタンはもう一度、神様にこう言うのです。「ヨブは、財産と子どもを奪われても、健康に恵まれているから、あなたを愛しているのです。もし健康を失えば、きっとあなたへの信仰を捨てるに違いありません」。

そこで神様はサタンに、ヨブの健康を奪うことを許可しました。するとヨブは、足の裏から頭の先まで、悪性の腫物で侵されるのです。夜眠れないほどの痛みがあり、やせ細っていきます。内臓も侵され、それが原因で体から悪臭が出るようになりました。そのため、人々からも避けられ、妻からも、「**神を呪って死になさい**」(ヨブ記 2:9)と見捨てられます。

しかしヨブは、そのような試練が続く中でも、決して神様への信仰を捨てませんでした。彼は、妻に向かってこう言うのです。「**あなたは、どこかの愚かな女が言うようなことを言っている。私たちは幸いを神から受けるのだから、わざわざいをも受けるべきではないか**」(ヨブ記 2:10)。

ヨブは、財産を失い、子どもを失い、健康も失い、妻からも見捨てられてもなお、神様への信仰を捨てなかったのです。これがヨブの信仰です。

2. 三人の友人たちによる「因果応報」による災いの解釈

ヨブには、三人の友人がいました。エリファズ、ビルダデ、ツォファルの三人です。彼らは、ヨブが災いの中で苦しんでいると聞いて、ヨブを慰めるために駆けつけて来ました。彼らは最初、ただヨブのために涙を流し、一週間、一言も語らずに、ヨブのそばに寄り添い続けたのです。

しかし三人の友人たちは、ヨブと会話を交わし始めると、次第に態度が変わっていきます。ヨブ記の 3-31 章までがヨブと三人の友人たちとの討論の内容が書かれていますが、その討論のテーマは、ヨブの災いの原因は何かというものです。

三人の友人たちは、ヨブの災いの原因を「因果応報」の原理で解釈して、ヨブを教え導こうとします。「因果応報」とは、良いことを行なえば報われ、悪いことを行なえば裁かれるというものです。三人の友人たちは、ヨブの災いの原因は、ヨブの罪にあると考えます。ヨブが何か大きな罪を犯しているから、このような大きな災いに遭っているのだと考えたのです。だから彼らは、自分の罪を認めて悔い改めるようにとヨブを責め立てるのです。

3. ヨブの問題点

しかしヨブは、三人の友人たちの考えに納得できないのです。ヨブは神様に愛され、自分も神様を愛し、そして隣人をも愛してきたのです。ヨブには、このような大きな災いを受けなければならないほどの大きな罪があるとは、どうしても思えなかったのです。もちろんヨブには全く罪がなく、完璧な人間だったわけではありません。ヨブも私たちと同じ人間ですから、確かに罪がありました。しかしヨブは、自分の罪を神様に隠すことなく、神様の前に告白し、赦しを求めたのです。そして贖い主に頼り、いけにえも献げて、罪の贖いをしてきたのです。神様からも、「**彼のように、誠実で直ぐな心を持ち、神を恐れて悪から遠ざかっている者は、地上には一人もいない**」(ヨブ記 1:8)と言われるほど、ヨブと神様との関係には問題はなかったのです。

それなのに突然、神様との親しい交わりを失い、祝福された人生を失い、大きな苦しみに襲われ、孤独と絶望のどん底に突き落とされたのです。ヨブは、神様とサタンとのやり取りを知りませんから、神様がなぜ自分をこんな目に遭わせるのか、なぜ神様が沈黙を守っているのか、なぜ助けてくださらないのかが分からないのです。

ヨブは、神様の沈黙があまりにも長く続くので、次第に神様に対して不信感を持つようになっていきます。自分は誠実に歩んでいるのに、神様が私に誠実に関わってくださらない、そうしてヨブは、神様が間違っていると考えようになり、ついには、神様よりも自分のほうが正しいと考えるようになっていったのです。

そのような中で、ヨブの前に「エリフ」という人が現れます。エリフは、ヨブと三人の友人たちとの討論をずっと聞いていました。しかしずっと聞いていいる中で、エリフは段々と怒りを覚えてきたのです。それは、ヨブが神様よりも自分のほうが正しいと考えるようになって

ていったからです。そうしてエリフは、32-37 章まで、ヨブのその問題点について語り、ヨブを教導こうとするのです。ヨブはただただ、エリフの言葉に黙って耳を傾けるのです。

4. ヨブに対する神様の言葉

エリフの言葉が終わると、38 章からついに、神様が長い沈黙を破って、ヨブに対して口を開いていきます。38-39 章で神様は、御自身が自然と動物を造られ、それを治めておられることをヨブに示されます。そして 40-41 章では、御自身が悪をも治め、支配しておられることをヨブに示されるのです。

こうしてヨブは、神様が長い沈黙を破って、自分に語りかけてくださったことによって、神様よりも自分を正しいと考えていたその罪を悔い改めるようになるのです。そしてヨブは神様に、「**私はあなたのことを耳で聞いていました。しかし今、私の目があなたを見ました**」(42:5)と言うのです。ヨブは、今まで神様のことを、耳で聞いて頭で理解していたけれども、この苦しみの経験を通して、神様のことを、心で理解できるようになったと言うのです。では、ヨブは具体的に神様の何を心で理解できるようになったのでしょうか。それは、「**あなたには、すべてのことができること、どのような計画も不可能ではないことを、私は知りました**」と語っているように、ヨブは、自分に起こるすべてのこと、苦しみも悲しみも、すべては神様の御計画の中にあることを、頭ではなく、心で分かるようになったのです。そして全世界を治め、悪をも支配しておられる全知全能の神様が、自分のことを確かに愛し、守ってくださることを、頭ではなく、心で分かるようになったのです。こうしてヨブは、自分の罪を悔い改め、神様への信頼、神様との交わりを回復していったのです。

5. 三人の友人たちに対する神様の恵み

今日の聖書箇所 7-8 節で神様は、三人の友人の一人であるテマン人エリファズに向かってこう言われます。「**わたしの怒りはあなたとあなたの二人の友に向かって燃える。あなたがたが、わたしのしもべヨブのように、わたしについて確かなことを語らなかつたからだ。今、あなたがたは雄牛七頭と雄羊七匹を取って、わたしのしもべヨブのところに行き、自分たちのために全焼のささげ物を献げよ。わたしのしもべヨブがあなたがたのために祈る。わたしは彼の願いを受け入れるので、あなたがたの愚行に報いるようなことはしない。あなたがたは、わたしのしもべヨブのように、わたしについて確かなことを語らなかつたが**」。

ヨブと三人の友人たちは、ヨブの災いの原因に対する考え方の違いから、対立しました。ではどちらが正しかったのでしょうか。真の審判者である神様は、ヨブは「わたしについて確かなことを語り」、三人の友人たちは「わたしについて確かなことを語らなかつた」と判決を下します。そして三人の友人たちの言動を「愚行」と呼び、彼らに対して「怒り」を燃やしていると言われるのです。

では、三人の友人たちは、何が間違っていたのでしょうか。彼らは、すべてを「因果応報」の原理で解釈しました。ヨブの災いも、神様御自身のことも「因果応報」の原理ですべて解

釈したのです。「因果応報」とは、良いことをすれば報われ、悪いことをすれば裁かれるというものです。ヨブの災いも、ヨブが何か悪いことをしたから災いに遭っているのだと解釈して、ヨブを責め立てたのです。

三人の友人たちには、欠けている視点が一つありました。それは、「恵み」という視点です。神様は確かに、良いことに報い、悪いことを裁かれる方です。しかしそれだけでは、神様を語り尽くせないのです。神様は、「恵み深い方」でもあるのです。悪いことをした人を、罪人を贖いによって赦される方でもありました。旧約時代には、動物の犠牲によって、新約時代には、イエス様の十字架によって、罪人を憐れみ、赦される方でありました。神様は確かに「因果応報」の方でもあります。しかし「因果応報」だけの方ではないのです。罪人を憐れみ、救いの手を差し伸べる「愛と恵みに満ちた方」でもあるのです。聖書は、「**神は愛です**」(**Ⅰヨハネ 4:16**)と語るのです。三人の友人たちは、神様を「因果応報」だけの方であると考えたのです。それに対してヨブは、神様を「因果応報」の方でありつつも、「恵み深い方」でもあると考えたのです。その意味でヨブは、神様について「確かなことを語り」、三人の友人たちは「確かなことを語らなかつた」のだと思います。

では神様は、神様について「確かなことを語らなかつた」三人の友人たちを、怒りに任せ滅ぼしてしまわれるのでしょうか。そうではありません。神様は三人の友人たちに、「自分たちのために全焼のささげ物を献げよ」と言われるのです。「全焼のささげ物」とは、罪の赦しと神様との交わりの回復のために献げられるものです。神様は、怒りに燃えつつも、決して三人の友人たちを見捨てなかつたのです。彼らに「愛と恵み」を示して、彼らの罪を赦し、彼らとの交わりを回復して、神様が「愛と恵みに満ちた方」であることを教えようとされたのです。

神様は、神様よりも自分のほうが正しいと考えるようになったヨブに対して、口を開き、彼を悔い改めに導き、すべてのことは神様の御計画の中にあることを教えられました。さらに神様は、「因果応報」だけで神様のことを語ろうとする三人の友人たちに対して、全焼のささげ物を献げさせ、神様の「愛と恵み」を教えられたのです。神様は、ヨブに対しても、三人の友人たちに対しても忍耐深く、愛をもって彼らを教え、彼らを成長させようとされたのです。

6. ヨブの回復

しかし神様は、三人の友人たちに、自分たちで「全焼のささげ物」をするようにとは言われませんでした。ヨブのところへ行き、ヨブに祈ってもらうようにと言われたのです。神様は、御自身とヨブ、御自身と三人の友人たちの交わりの回復だけでなく、ヨブと三人の友人たちとの交わりも回復しようとされるのです。

ヨブは、散々、自分を責め立てた三人の友人たちのために祈るようにと、神様に求められるのです。彼らが赦されるように、彼らが神様の「愛と恵み」を知ることができるようにと祈ることを求められるのです。神様は7-8節で、ヨブのことを四回も繰り返して「わたし

のしもべヨブ」と呼びます。ヨブは、「神様のしもべ」であることを求められたのです。「神様のしもべ」として、神様に従うことが求められたのです。

では、ヨブはどうしたのでしょうか。ヨブは三人の友人たちのために祈ったのでしょうか。10節には、こうあります。「**ヨブがその友人たちのために祈ったとき、主はヨブを元どおりにされた。さらに主はヨブの財産をすべて、二倍にされた**」。ヨブが、「神様のしもべ」として、神様に従って、三人の友人たちのために祈った時に、神様はヨブの病を癒し、ヨブの財産を二倍に回復されたのです。それだけではありません。ヨブのもとから離れていた兄弟たち、姉妹たち、知人たちとの交わりも回復し、子どもたちも以前と同じ、息子七人、娘三人を新たに与えられたのです。ヨブは、自分のために祈った時に、すべてを回復したわけではありません。三人の友人たちのために祈った時に、つまり神様に従った時に、また「神様のしもべ」として生きた時に、すべてを回復したのです。

おわりに

ヨブ記のテーマは、苦難の中でも「神様のしもべ」として生きるということだと思います。ヨブが試されたのは、1：9にあるように、「**ヨブは理由もなく神を恐れるか**」ということでした。ヨブは財産や家族を失っても神様を恐れるか、健康や妻の信仰を失っても神様を恐れるか、人々に捨てられ、友人たちからも責め立てられても神様を恐れるか、神様が神様であるという理由だけで、「神様のしもべ」として徹底的に生きるかということでした。

ヨブや三人の友人たちは、途中、神様の道を見失いました。それでも神様は、彼らを決して見捨てず、彼らに「愛と恵み」を示し、彼らを訓練し、最終的に彼らを成長させたのです。

神様は、「因果応報」の方でありつつ、同時に「愛と恵みに満ちた」方です。そのことが最も豊かに現わされているのが、イエス様の十字架です。神様は善に報い、悪を裁かれる方です。しかし同時に「愛と恵みに満ちた」方であるがゆえに、御自身のひとり子であるイエス様を裁き、罪人を赦し、救われるのです。これが聖書によって示された真の神様の姿です。

私たちは、イエス様を通して神様を見上げなければなりません。ヨハネ 1：17-18には、こうあります。「**恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである**」。それでこそ私たちは、神様について「確かなことを語れる」ようになるのです。また私たちは、苦難の中でも、イエス様を通して神様を見上げなければなりません。イエス様によって、イエス様の十字架によって、神様の「愛と恵み」が豊かに現わされました。苦難の中でも、神様は確かに「愛と恵みに満ちた方」である、その「愛と恵み」によって私たちを守り、訓練し、その苦難を通して私たちが神様のことを「心で分かるように」してくださる、そして成長させてくださると信じなければなりません。それこそが、苦難の中でも「神様のしもべ」として生きるということではないでしょうか。私たちが「神様のしもべ」として生き続ける時、神様は必ず私たちに豊かな祝福をもって臨んでくださるのではないのでしょうか。

天におられる私たちの父なる神様。

「ヨブ記」を読み終えることができ、感謝いたします。ヨブ記を通して、私たちの人生の苦難の意味を知ることができます。また神様御自身がどのような方であるかを知ることができます。私たちも人生のあらゆる苦難の中で、ヨブのようにあなたを見失ってしまいます。また他の人の苦難を見て、三人の友人たちのように裁いてしまいます。どうか苦難の中で、イエス様を通してあなたを見上げることができますように。苦難の中でも「あなたのしもべ」として生き続けることができますように。そして苦難を通して私たちを成長させ、あなたのことを心で分かっていくことができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。